

除夜の作じよや さく
(高適こうせき)

旅館りよかんの寒燈かんととうひとり眠ひと ねむらず

客心かくしん何事なにごとぞ転うたた悽然せいぜん

故郷こきよう今夜こんや千里せんりを思おもう

霜鬢そうびん明朝みょうちよう又また一年いちねん

旅館寒燈獨不眠 客心何事轉悽然
故郷今夜思千里 霜鬢明朝又一年

解説 この詩は旅先で大晦日を迎え、故郷をしのび、白髪身を悲しんだものである。

語釈 ※除夜Ⅱ大晦日の夜。 ※寒燈Ⅱもの寂しい灯火。 ※客心Ⅱ旅に出ている者の心。 ここは作者自身をさす。 ※何事Ⅱどうしてか。
※轉Ⅱいっそう。 ※悽然Ⅱものさびしいこと、 ※思千里Ⅱ故郷の人が千里離れたわたしを思っているだろう。 ※霜髪Ⅱ白髪のこと。

通釈 侘しい旅館の一室、もの寂しい灯火のもとで、独り寝つかれない。旅の愁いは何故、いっそう多くなるのであろうか。今夜は大晦日、故郷では家族の者達が、遠く旅に出ている私のことを思っていることであろう。夜が明けると、白髪の老いの身にまた一つ年を取るのだ。